

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第43号 2025年10月31日 発行

目次

*着任のごあいさつ（松岡李奈）	2	*小幡篤次郎アルバム・小幡篤次郎略年譜 (西沢直子).....	8・9
特集：小幡篤次郎著作集完結記念		*『小幡篤次郎著作集』別巻の刊行（西沢直子）.....	10
*小幡著作集完結によせて（池田幸弘）	3	*川崎勝さんのこと（小室正紀）.....	11
*海外新聞は明治・大正期の福澤諭吉、小幡篤次郎を どのように報道したか（井上琢智）	4・5	*川崎勝氏の業績（西沢直子）.....	12
*戦う女性の「修身要領」（舛部直）	6	*新収資料紹介（松岡李奈）.....	13・14
*小幡篤次郎の訛語、 「精神」・「良知」・「良能」について（松田宏一郎）	7	*主な動き.....	15
		*センター諸記録（2025年4月～2025年9月）.....	16



『文明論之概略』150年と小幡篤次郎



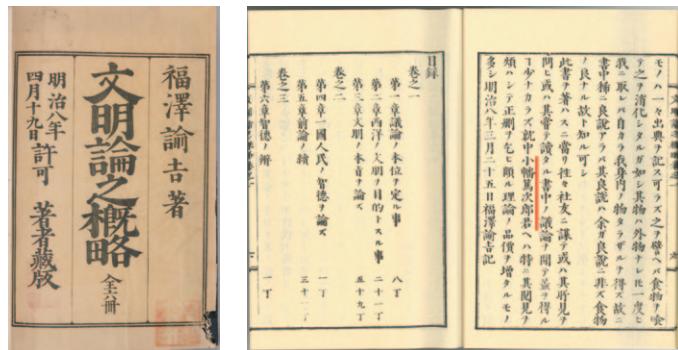
本年は明治8(1875)年に『文明論之概略』が刊行されて150年になる。明治7年10月12日、ロンドンにいる門下生馬場辰猪に宛てた書簡で日本の現状を「マインド之騒動ハ今尚止マズ」と分析した福澤諭吉は、『学問のすゝめ』を執筆しながら、文明論執筆の準備を始めていた。明治7年2月8日初立案、2月25日再案「文明論プラン」と書き込まれた福澤自筆のメモが残されている。翌年4月の脱稿後島津復生に宛てた書簡では、自身の読書経験は和漢洋書を問わずいずれも甚だ「狭く」、この機に原書を手に取り、読んでは執筆、筆を置いては原書を読むことを繰り返し、「マヘヨ浮世は三分五厘」、間違えても自分1人のしくじりで、難しいことは後進の学者に譲ると覚悟を決めて書いたと述べている(『福澤諭吉書簡集』第1巻、岩波書店、2001年)。

今度初の著作集が完結した小幡篤次郎もその緒言に登場している。この本は多くの人に所見を問うたが、なかでも小幡には「特にその閲見を煩わして正刪を乞い、頗る理論の品価を増たるもの多し」と彼の校正によって高尚な議論になったことを感謝している。しかし小幡の貢献については、これまで「小幡先生逸話(七)」(『時事新報』7752号)にごく簡単に触れられている程度であった。近年になって平石直昭氏の著書『福澤諭吉と丸山眞男 近現代日本の思想的原点』(北海道大学出版会、2021年)をはじめ、その再検討が図られている。

『文明論之概略』は、『福澤全集緒言』によれば「儒教流の故老」に訴え、彼らを味方にしようとの腹案をもって著わされた。自筆原稿はわずかにしか残っていない『学問のすゝめ』に比べて、『文明論之概略』は様々な段階の自筆原稿が残っている。そこからは成稿までの苦労が窺われ、思い入れの深い著作であったのであろう。明治11年に、当時三田演説館に接続していた万来舎で行われることになった慶應義塾講義所講義の初回10月10日は、福澤が『文明論之概略』を取り上げている。

前述「文明論プラン」は長い間所在不明であったが、平成3年再発見された。この時のいきさつについては、『三田評論』928号に記載されている。

(文責 西沢直子)





着任のごあいさつ

福沢研究センター助教 松 岡 李 奈

2025年4月より福沢研究センター助教に着任いたしました。1951年設立の塾史編纂所、その後塾史編纂所を引き継いだ塾史資料室と、連綿と続く歴史ある福沢研究センターで職務にあたることができ、大変光栄に思います。

福沢研究センターとの出会い

私にとって、福沢研究センターは慶應義塾大学入学後の大半の時代を濃密に関わり、歴史研究および資料の保存・活用を生業とする機会を得た場所です。指導教授である井奥成彦名誉教授の勧めで、2013年に福沢研究センター共催のアーカイブズ講座へ参加したことが、私が福沢諭吉と向き合う契機となりました。高校生・大学生を対象とする初級の部が設けられたばかりの時期でしたが、『福翁自伝』読書会を軸に大阪・中津と福沢の足跡を巡ることを趣旨とする行程のもと、大阪では適塾を、中津では福沢旧居をはじめとする史跡見学と襖下貼り調査作業を体験しました。猛暑の中津ではじめて見た福沢旧居と襖解体とともにあらわれる下貼り文書、福沢家ゆかりの古文書の光景を、いまだに鮮明に覚えています。元々福沢を研究対象としていたわけではありませんでしたが、非常勤嘱託や調査員の立場で福沢研究センター業務に携わり、西澤直子氏の指導を受ける中で福沢研究の妙を知りました。一方で、自分が福沢研究を行えるかと考えると、全くそうではなく、膨大にある先行研究の蓄積を享受するばかりでした。長沼関係資料をはじめ、福沢桃介関係資料等多様な資料の整理に従事するうちに、福沢研究を志すようになったと思います。

中津と福沢

こういった資料整理の経験から2019年に中津市教育委員会へ推薦いただき、新中津市学校・中津市歴史博物館を軸に中津市と慶應義塾の共同研究を担当する幸運を得ました。中津市では丸6年勤務いたしましたが、その間感じたことは、福沢研究発展への大きな期待です。幸甚ながら、博物館では福沢と濃密に関わった中津藩士の関係資料を担当し、福沢に言及する新出資料を調査することができました。優れた先行研究が山積する福沢研究ですが、新出資料を軸とする新たな実証研究は言うまでもなく新たな一歩です。2019年に中津市歴史博物館が開館したことから、中津地域、特に中津藩士関係資料が博物館に寄託されました。これらの資料には藩政や洋学

に関するものが多く含まれており、資料的制限のあった幕末から明治初期にかける福沢の動静について、研究の進展が期待できると考えました。

また2024年7月、福沢が一万円札の肖像から退くことを受けて、中津市は福沢PR活動を大々的に進めました。私はPRの一環として福沢に関する博物館特別展の開催や町歩きマップの作成を担当し、歴史研究に加えて多種多様な手段・角度を以て福沢諭吉像を捉え直したことは、研究姿勢を改めることにつながりました。中津の人々は福沢を郷土の偉人、郷土のアイデンティティの1つと認識しており、それは故郷独特の福沢の受容ですが、その土台には地元愛だけでなく、これまで慶應義塾を中心に進められてきた伝記や著作集、書簡集といった基礎資料の編纂や実直な学術研究があると考えます。これまで塾史編纂所や塾史資料室、そして福沢研究センターが行ってきた業務の重要性を再認識しました。

一方で、地方自治体のアーカイブズに関与すればするほど、大切に伝来してきた資料が、世代交代の狭間で喪失の危機にあり、歴史資料の悉皆調査や資料保存が喫緊の課題であることを痛感しました。また資料収集だけなく、小幡篤次郎や中津市学校の蔵書の修繕など課題は多く、とても6年間では納めることができませんでした。自身の福沢研究をいかに進めていくか、また携わった資料調査や保存活動をどのように継続すべきか悩んでいた時に、福沢研究センター職務のお話を聞き、現在に至ります。私にお声がけいただき、大変嬉しく思うと共に、襟を正す思いで着任いたしました。福沢研究センターの専任所員として、これまでの調査を踏まえて、福沢研究そして福沢を軸とする近代史研究に邁進していく所存です。

最後に、福沢研究センター業務における自分の強みは何であろうかと考えた時、2点が思い浮かびました。1点は福沢研究センターの目的の1つである「福沢諭吉・慶應義塾に関する研究成果をふまえた教育」を自ら経験したこと、もう1点は歴史資料の収集・整理・保管・展示について若輩ながらに経験を積んできたことです。微力ではありますが、自身の経験をもとに福沢研究センター業務に貢献していきたいと思います。ご指導ご鞭撻いただきますよう、何卒よろしくお願ひいたします。



小幡著作集完結によせて

福沢研究センター客員所員 池田幸弘

今般、一般社団法人福沢諭吉協会と、学校法人慶應義塾の手によって、小幡篤次郎著作集全五巻の刊行が完結した。この困難きわまる事業の遂行は、編集委員会各位、とくに西沢直子氏の獅子奮迅のご尽力によるところが大きい。刊行委員会の末席に連なるものとして、刊行終結はまことに欣快とするところであり、編集委員会各位にたいして深甚なる謝意を表するものである。

さて、小幡著作集を編むにあたり、その背景についてすこし記しておく必要があろう。さまざまな写真が伝えるように、たいてい福沢の近くに座り写真に収まりつも、小幡の表情はかならずしも明るくはない。文字通りのCEOであった福沢に比して、一般にその存在は知られるところは少なく、さりながら塾の行政、運営上の責任はきわめて重かったといわざるをえない。今回収められた書簡のなかにも、そのような小幡の苦悩が記されたものは少なくはない。

ここまでいまでも知られていたことであろう。著作集を編むにあたっては、小幡を番頭さんや第二バイオリンのポジションとしてだけではなく、あくまで主役として、一人の思想家、行動する優れた実務家として評価したいという企図があった。これが、今般の著作集刊行の意図ではなかったかと推察している。

今回の著作集刊行によって、研究の種はすでにまかれただみるべきであろう。ただし、これによって、どのような小幡像が描かれるかは将来の課題であり、それを若干でも見ることができれば私としても幸いである。

残念ながらここではそのような新しい方向を示唆することはできそうもないで、慶應義塾のスピリットに関連がありそうなことについて若干の所感を記することで責を塞ぎたい。

以下で論評の対象としたいのは、小幡筆として伝わる万来舎の記である。まず、主客の別についてはつぎのような記載がある。(以下、引用は本著作集別巻による)
「先づ来るの客を主とし、後れて来るの客を客とす。」

つまり、厳格に招く側、招かれる側という区分はここにはない。上にあるように、たまたま先にきたものは主として、あとにきたのは客としよう、というわけだ。

このような主客の区分なしに応じて、退席、別れのさいも、あっさりしたやり方が推奨される。

「去るに送らず、来るに迎へず。」

客人が去るさいには見送るというのは、全世界的にもかなり一般的な習慣なのかもしれないが、そのような礼儀はここでは採用されない。つまり、帰りたいものは勝手に帰る。見送りもない。同様に、来たさいのお迎えもない。まことにあっさりしている。

こうした主客のあり方に対応して、万来舎、ひいては義塾のスピリットにかかるると考えられる共同体としての義塾のあり方について、小幡はつぎのように述べている。「来る者は拒まず、去る者は留めす。」

さらに、「興あらば居れ、興尽きなば去れ。」とされる。

前者の引用では、来るのは拒まない。つまり、万来舎にたいする参入規制はない。おそらくは義塾それ自体についても同様であろう。逆に、去りたい者は自由に辞去してよいと。これも義塾それ自体について諷諭されているとも考えられる。こちらは退出の自由だ。

そして、当人が面白いと思えばいつまでもいてよいし、逆につまらんと思えば去ればよいとも。

義塾という呼び名については、諸説あって私にはよくわからないが、それが有するスピリットについては、上記の万来舎之記からの引用は語ってあまりあるのではないか。

このように、共同体としては開かれたものが小幡たちの脳裏にあったと考えられる。上記で描かれているように自由な共同体が塾の本義であるのならば、その精神や慣習もダイナミックなものだと考えてよい。出入りが自由であれば、そのスピリッツも元来時代とともに変化していくものであろう。

このような自由なスピリッツは、とくに義塾の理念に限定されるわけではない。しばしば指摘されるように、渋沢や福沢の時代には、かれら自身も含めて、多くの経営者がたくさんの会社を作り、そしてたくさんの会社を潰している。そのなかには、もちろん経営状態がよくない、あるいは将来の展望が開けないと当然の理由で潰れていったものもたくさんあるが、たんにほっておかれた、経営側が関心を失ったというものもありそうだ。

その後の重化学工業化に伴い、いきおい企業サイズも大きくなり、そして企業をささえるルールも精緻化されていった。内部組織も官僚的なものになっていった。

しかし、これらはすべて福沢や小幡の時代のあとに起こったことである。

自由な参入、退出の場というのは、ことによると明治期の企業についてもいいことなのかもしれない。面白そうなことならばやる。面白そうな業界ならば自由に参入する。そして、つまらなくなればあっさりやめる。それがかれらの経営である。

談論風発の場としての、万来舎にもらられたスピリッツは、現在の日本において、生かされているだろうか。万来舎之記はさまざまな問い合わせをしてやまない。

海外新聞は明治・大正期の福沢諭吉、小幡篤次郎を どのように報道したか —「邦字新聞デジタル・コレクション -The Hoover Institution Library & Archives-」を中心に—

関西学院大学学院史編纂室主任研究員 井 上 琢 智

本稿は現在 Web 上で公開されている「邦字新聞デジタル・コレクション -The Hoover Institution Library & Archives」(<https://hojishinbun.hoover.org>) を中心に慶應義塾が明治・大正期に海外の日本語新聞（一部英語）などでどのように報道されてきたかを資料的に示し^{1)・2)}、そのうえで「生前の福沢諭吉」と「生前の小幡篤次郎」にテーマを絞ってその報道内容と意義を明らかにすることを目的とする。

1) 生前の福沢諭吉*に関する報道

福沢諭吉死去(1901年3月)の前年5月9日に恩賜を受けたが(1073頁)³⁾、その模様を『やまと新聞』⁴⁾(ホノルル、1900.05.24:Page 3)は以下のように伝えた。

「福澤諭吉翁へ恩賜 福澤諭吉翁に対し去九日左の御沙汰ありたり 福澤諭吉 (姓)夙に泰西の学を講し校舎を開きて才俊を育し新著頒ちて世益に資する三十余年其功績 (業)歎からず因て思召を以て金五万円賜ふ明治三十三年五月九日宮内大臣子爵田中光顕 右に付翁の代理として小幡篤次郎氏宮内省に出頭し大臣官房に於て恩命を拝したり 小幡氏還て伝達せしに翁は直ちに氏を代理として御礼を言上したりとぞ」と報道した(「福沢諭吉」で検索)。

『修身要領』(1900年6月決定稿<福沢による揮毫版>、336-40頁)について『央州日報』(オレゴン、1912.09.30:Page 2)について、ケンナン述説「日本人に道徳ありや」の中で

「新日本に於ける最も有力なる教育家 而して私立大学の泰斗たる慶應義塾の鼻祖福澤諭吉氏は数年前新日本国民の依頼すべき道徳的標準の大綱を示し之れを修身要領と題して普く朝野に頒布された同書は著者の終焉後英文に翻訳 [Fukuzawa's Moral Code、出版年明記されず] して昨 [1911] 年に倫敦に開催された日英博覧会⁵⁾に送附された。[日米の道徳を比較して最後に] 個人並びに家族は社会の分子にして社会の健全なる基礎を築かんと欲せば個人家族共に独立自尊の精神を重んずべし、男尊女卑は野蛮の陋習なり文明社会の男女は同等同権にして相愛し相敬するにあり」

と報道した(「福沢諭吉」で検索)。

本書は、「前文」と「独立自尊」を基礎とした新しい「修

身処世の法」29条からなり、その第1条で「吾党の男女は独立自尊の主義を以て修身処世の要領」を宣言したものであり、第8条・第9条では男女関係が語られ、男尊女卑を「野蛮の陋習」とし、文明の男女は同等同位であり、一夫一婦制が「人倫の始」とされた(337頁)。

この英訳書は普通部・商工学校・大学での教材として用いられた(340頁)との説明はあるものの「昨年倫敦」に開催された日英博覧会に送附されたことには言及されていない。

2) 生前の小幡篤次郎*に関する報道

このような福沢に対して小幡篤次郎(1842-1905)について生前の活動について『紐育新報』⁶⁾(1912.01.01:Page 5)の記事「森村組」(卓郎筆)の中で以下のように説明した。

「〔森村〕豊^(姓)氏は卒業し塾の助教をやつて居たが其以前に〔森村〕市左衛門^(姓)氏は内地商売に数千円の損をしたから亦、小さな處に引移つて革類と洋服の商売をやつて居た、それから程経て塾の故小幡篤次郎氏の勧めで豊氏を亞米利加にやることにしたが、旅費が充分にない、止むを得ず自分の古服を直して着せたたり…渡米さした」

と報道した(「小幡篤次郎」で検索、3件の内1件)。

渡米後、豊は佐藤百太郎⁷⁾とともに

「紐育最初の商店…、共同で日の出商会〔佐藤との共同経営を解消し、1881年、モリムラ・プラザーズと改称〕なる陶器、雑貨の小売店を紐育第六街二三八一曾て紐育新報所在地の一階地下室に開店した。之が抑^(姓)も森村兄弟商会の前身である。大正十五年には創業五十年記念祝賀会が催され、森村兄弟商会の日本貿易に貢献した功績を表彰されたが、是等の人々は、貿易の先駆者であると共に、紐育在住者の草分けである。森村豊は二十三才、慶應義塾出身で兄市左衛門が心服してゐた福澤諭吉の従姉に依り、日米貿易の大志を抱いて渡米したもので、開店後森村は店務を佐藤に托し、自らはポケーブシーのイーストマン・カレッジ〔Eastman <Business> College in Poughkeepsie, New York〕に入学勉強して将来の発展に備へる所があった」

(『在米日本人史』サンフランシスコ、1940年12月20日、28頁、「佐藤百太郎」で検索)⁸⁾。

3) おわりにかえて⁹⁾

このように本コレクション所蔵新聞の発行時期（1903–1926）を考えると、福沢や小幡の生前の活動を新聞が直接報道することがほとんどなかったのは自然なことであった。むしろこの時期は鎌田栄吉（1857–1934）の時代であったといえる。というのは、その時代に鎌田は¹⁰⁾慶應義塾の評議会議長（1898–1902、1925–1929）および塾長（1898–1925）を務めた時代であり、衆議院議員、貴族院議員を務め、文部大臣就任（1922）により塾長を辞任した時期であった。その意味で鎌田が慶應義塾を代表者としてはもちろん、在任していた各種役職の立場からの言動が新聞各紙に登場し、社会に与えた影響は大きかったといえる。具体的には、彼の言動は「排日問題」、「新国民主義の一条件：国民皆兵主義」、「植民地問題」、「国際労働機関（ILO）」での言動であり、「学生の政治運動」についての発言であったが、これらの問題については稿を改めざるを得ない。

注

1) 検索順序

- (1) 本コレクションの URL (<https://hojishinbun.hoover.org>) にアクセスする。
- (2) 「キーワード」欄に本稿では「福沢諭吉」(249件中1件採録。但し、1910年以降の件数である。)、「小幡篤次郎」(2件の内1件採録) で検索した。
- (3) 「慶應義塾」全体の報道件数・内容を検索した。その件数は1903年の1件から、①1911(明治44)年まで1,685件、②1926(昭和元年)年まで3,558件(①を含む)である。なお、「福沢諭吉」による検索では、採用した1900年5月24日の記事が初出である。
- (4) これらの記事は1画面にほぼ10件掲載され、画面①から画面に分けて各記事が掲載されており、見落としの可能性もあるが、ほぼ840件の記事を悉皆点検した。

2) 凡例

- (1) この時期内で発行地が朝鮮、中国等である新聞は省いている。例えば、『朝鮮新報』(仁川、1892.05.15～1908.11.20)、『京城日報』(ソウル、1907.06.23～1929.10.23)、『満洲新報』(1908.12.13～1923.06.23)などについては検索の対象としていない。
- (2) 言及・引用した記事の掲載新聞紙の来歴(出版地・所蔵年月日)については本コレクションの冒頭に書かれている。
- (3) 漢字は適宜変更するが、引用文中の「ふくざわ」の表記については原典の表記に従った。また原文に付されたルビは原則省いたものの、一部読者の便を考慮して井上が〔〕を付してルビを振った。
- (4) 本文中の□は判読不明の字を示し、〔〕内の文章は筆者による補足である。
- (5) 『慶應義塾史事典』「社中の人びと」に立項されている人物については*を付した。
- 3) 本文において特段の説明をせずに示した頁数は『福澤諭吉事典』(2010)の頁数である。

- 4) 『やまと』は1895年10月に安野伸太郎によりホノルルで創刊され、週二回発行された。翌年8月にはオーナーが変更、『やまと新聞』に改題された。
 - 5) この「日英博覧会」は正しくは1910年5月14日から10月29日まで開催され、御木本真珠、安藤七宝、緑茶が好評で、東大寺・鳳凰堂・東照宮陽明門の模型が出品され、期間中600万人が入場した。
 - 6) 『紐育新報』は甲斐健一と林富平により1911年に発刊された。経営者の変更はあったものの『日米時報』とともにニューヨークの二大日本語新聞になった。ニューヨークの日本人社会は日本のビジネスマン、政治家、学者、芸術家、社会主義者、資力や資金援助のある学生が中心で、西海岸やハワイの読者層とは異なった。
 - 7) 『ハワイ報知』(1958.09.05:Page 6)は「サンフランシスコでは、日本の医者〔順天堂第2代堂主、同医院の初代院長の佐藤尚中〕の息子で茶や日本の雑貨を売る米人の店に務めていた」が、一時帰国し自らが米国商法実習生を募集し「明治9年新井領一郎〔生糸問屋〕、増田林蔵〔狭山会社〕、伊達忠七〔旧姓・早川、先収会社<三井物産の前身>〕、森村〔6代目森村市左衛門の異母弟〕、鈴木東一〔丸善〕の諸氏が佐藤百太郎氏に率ゐられて來紐し生糸、茶、美術骨董品、陶器一雑貨及び薬品等の貿易に從事せる」と『紐育新報』(1922.11.29:Page 1)と報道している。なお、森村悦子『日米貿易を切り拓いた男 森村豊の知られざる生涯』(東洋経済新報、2021)がある。筆者は豊の曾孫である。
 - 8) 他に以下の記事が掲載されている。『日米時報』(ニューヨーク、1924.07.19:Page 23)「開拓者の苦闘 森村組の創業時代」、『羅府新報』(ロサンゼルス、1925.12.12:Page 2)「森村豊は森村市左衛門*の実弟」、『日米新聞』(1936.02.17:Page 3)「明治初年慶應義塾出身の直ちに森村組に入る」(本文は英語)。
- なお、豊の入塾の保証人小幡は「仏人デシャルム〔仏陸軍中尉〕氏の帰欧に際して製鞍伝授の感謝状」を送っている(若宮卯之助『森村翁言行録』改訂版、森村豊明会、1969、口絵)。
- 9) なお、鎌田栄吉の「諸活動の記録」以下、本コレクションに収録されている「慶應義塾」関連記事のテーマは以下のものである。1) 大学昇格、2) 学制等 [(1) 医学科新設、(2) その他]、3) 教育の男女均等(聴講生・正規学生)、4) 人事、5) 外国人教師 [① 20、Lloyd, Arthur (1256頁)、② 70、Vickers, Enoch Howard (1266頁)、③ 108、Buchanan, Daniel Houston (1272頁)、④ 112 Bovingdon, John (1274頁)、⑤ 127 Jones, Thomas E. (1276頁)、⑥ 129 Langford, D. B. (1276頁) :「Ⅲ 外国人教師一覧」『慶應義塾150年史資料集2』2016]、6) 慶應義塾記念祭、7) 学風、8) 施設、9) 書籍販売、10) 学生スポーツと文化活動 [(1) 柔道、(2) 野球、(3) テニス、(4) ラグビー、(5) 文化活動]、11) 同窓会、12) 卒業生 [(1) 野口米次郎、(2) その他]、13) その他
 - 10) 経済学担当教員としての鎌田の貢献については、井上琢智「鎌田栄吉の経済思想史－慶應義塾における経済学教育－」(『経済学論究』関西学院大学、67巻1号、2013年6月、129–54頁)を参照のこと。

戦う女性の「修身要領」

東京大学法学部教授 荘 部 直

『小幡篤次郎著作集』別巻には、「修身要領」(1900・明治33年2月発表)と、小幡起草によるその下書きおよび「修身要領の解釈」の草稿の影印版が収められている。「修身要領」は、1898(明治31)年9月に脳溢血で倒れ、ようやく恢復した福沢諭吉が、国民の実践すべきモラルに関して、同時代の社会に適した綱領を作成するように小幡ら門下生に依頼し、彼らの議論をへて出来あがった草稿をみずから校閲して成った。

著作集でこの「修身要領」の本文に改めて目を通して、少し驚いた条文がある。第24条「日本国民は男女を問はず、国の独立自尊を維持するが為めには、生命財産を賭して敵国と戦ふの義務あるを忘る可らず」。これが起草された当時はもちろん、大日本帝国憲法第20条で規定された「兵役ノ義務」が「日本臣民」に課されていたが、実際に施行された徴兵令は成人男子のみを対象としている。

「修身要領」が批判対象として念頭に置いている教育勅語に関しても、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」の文句について、準公式注釈書である井上哲次郎『勅語衍義』(1891・明治24年)は「真正ノ男子ニアリテハ、國家ノ為メニ死スルヨリ愉快ナルコトナカルベキナリ」と説明していた。19世紀の当時は、日本だけでなく西洋諸国においても、軍務に就くのは男性のみであることが、当然の前提だったのである。

これに対して「修身要領」第24条では「男女」。「臣民」という表現を前文冒頭で1回使うのみで、本文の各条文では一貫して「国民」と呼び、何度も「男女」と念を押しているところにも意図があるだろう。小幡自身も、「修身要領」に関して交詢社の社員——ただし全員が男性の「此日本の中流の先達と成つてお出でなさる所の諸君」である——に解説する講演「修身要領の由来」では、とりわけ「男女同等のもので同じやうに此独立自尊の趣旨に従つて世の中に処して行くと云ふのが、重なる趣意でありまして拵へたものでありますので」と強調している(著作集第4巻、447頁)。

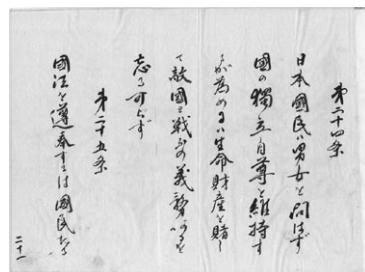
「男女平等」の主義を貫くならば、みずからが支える「国の独立自尊」のために敵国と戦う義務もまた、男女の「国民」が平等に果たすべきだ。これを、女性も積極的に軍隊に参加し、兵士として戦うべきだという主張と読むならば、まさしく現代の先進諸国において、フェミニズムの潮流がはげしく議論している話題と重なってくる。佐藤文香『女性兵士という難問——ジェンダーから問う戦争・軍隊の社会学』(慶應義塾大学出版会、2022年)で詳

しく論じられているが、たとえばすでに男性に徴兵制が布かれている国で、女性にも対象を広げることを、フェミニズムの観点から正当化してよいのかどうか。そうした問題として、盛んに議論されている。

そもそも、福沢が脳溢血を発症する直前に発表した著作が『女大学評論・新女大学』(単行本は1898年11月刊行)であった(西澤直子『福沢諭吉と女性』第8章、慶應義塾大学出版会、2011年)。その執筆開始の直前、1898(明治31)年6月に福沢は論説「槇田ノブの犯罪に就て」「ノブの控訴に就て」を『時事新報』紙上に掲載している。そこでは事実婚の夫を死なせてしまい「謀殺未遂」の有罪判決を受けた女性の弁護を試みたが、犯罪人を擁護したという理由で『時事新報』の署名人が起訴され、有罪判決を受ける結果となった(石河幹明『福沢諭吉伝』第4巻、217~226頁)。槇田ノブをめぐる論説、『女大学評論・新女大学』、「修身要領」の3つは、男女同権の主張としてひとつながりの仕事だったのである。

ただし、「修身要領」第24条が、徴兵制の対象の拡大を主張していると解するのは適切ではないかもしれない。『女大学評論』で福沢は、夫が「戸外百般の営業」に従事し、妻は「一家の内事を経営する」のが「今の日本の習俗」だと指摘している(『福沢諭吉全集』第6巻、494頁)。「修身要領」の前文でも述べられているように、時代の変化とともに、求められるモラルの細目も変わるという歴史観が、この文書の前提になっている。それを考へるならば、ここで福沢や小幡が女性に期待していたのは、国が戦争を始めたとき、戦場へ赴く男性を、家庭内で支えるという行動に限られるのだろう。

しかし、こうした家庭内での男女の分業が、すでに常識ではなくなった現代において、「男女平等」の原則は、防衛組織のなかでどのように具体化されるべきなのか。福沢や小幡たちが「修身要領」で掲げた男女平等の原理は、この21世紀の日本社会のなかで、さらに論じられるべき問題のありかを示しているようである。





小幡篤次郎の訳語、 「精神」・「良知」・「良能」について

立教大学法学部教授 松 田 宏一郎

『小幡篤次郎著作集』全6巻が刊行されたおかげで、小幡の著作や論文、書簡などに目を通すことが容易になったことは、思想史研究者として大変ありがたいことである。あらためて気づかされた事実や論点は多々あるが、以下では、William and Robert Chambers, *Introduction to the Sciences* (1843年、以降諸版あり) の抄訳である『博物新編補遺』(『著作集』第1巻収録。明治2年刊)について考えさせられた点を紹介したい。

小幡も言及しているように、中国で合信(Benjamin Hobson)による同書の漢訳『博物新編』(上海墨海書館、咸豐5年、1855年)が刊行されていた。日本でも万延元年の遣米使節の記録にはこの漢訳の言及があり、文久元年には「官版」として翻刻がなされていた(杉井六郎氏の研究に詳しい)。この漢訳版は、原書で255節以下にあたる人間の身体と精神についての部分を省略しているが、小幡訳の『補遺』は、この「人間」についての科学の箇所を訳出している。

ここで着目したいのは「人間の精神のあり方」("Man-His Mental Nature")に関する記述(原書では第282節以下)である。概略を紹介すると、人間の精神(mind)は全能の神が人間に与えた諸能力facultiesの総体であって、医学的には脳がその器官であるが、脳そのものが精神なのではない。精神は、神 Almighty が人間に与えた、一つの不可分な(single and indivisible)後述するように小幡はここを正確に訳出していない)実体である。そして、「精神」が包含する諸能力は等級と機能別に分類可能である。大きくは二つに分類でき、まず知的認識や思考を担うものが知性 intellect であり、次に実践的判断と行動にかかるものが情動的 affective or sentimental な能力である。さらにそれらの能力には上下の等級があり、intellectに含まれるものは知識、省察、因果関係の理解力があり、affective or sentimentalに含まれるものには、崇敬、慈悲、正義と良心(これはセットである)、さらにその下位の等級に、気概、希望、美の享受、自己愛、性欲や食欲といった感情や欲望充足的な心の働きが割り当てられる。

小幡の訳(『著作集』第1巻、142頁以下)では、mental natureは「人性」、mindは「精神」である。人間の精神構造を分析する用語について、明治2年の段階では定着した訳語はなかった。小幡の訳語選択は独自性を示している。たとえば堀達之助『英和對譯袖珍辭書』(1862年)や香港で出版されたロブシャイドの『英華字典』(1866年)では、mindについては「心」・「意」・「志」などはあるが、「精神」はない(spiritの訳語としては採用されている)。小幡があえて mind に「精神」を対応させた理由を推測

するなら、人体の物理的な力とは別の心的力を示そうとしたのかもしれない。

さらに、mindが持っている諸 faculties(「能力」)の分類と機能を小幡は訳していくが、まず知識を獲得し思考する力(intellectual faculties)を「良知」、他者に働きかけたり、自己の欲求を実現しようとする情動的な力(affective faculties)を「良能」と訳している。読者が気づかれるように、「良知」・「良能」は、『孟子』の「尽心」章から来ているが、さらには、陽明学でしばしば認識と実践の組み合わせとして語られる「良知」・「良能」を思い起こす用語法である。王陽明『伝習録』では、「良知良能は、愚夫愚婦も聖人と同じ。但だ惟り聖人のみ能くその良知を致し、而して愚夫愚婦は致すこと能はず」という一節が有名である。

小幡の訳語選択は配慮が行き届いている。mindはあらゆる人に備わるが、intellectの達成には優れた資質と努力が必要であり、その達成のための教育と、社会的実践を可能にする意欲や感情という心の強い働きとの両者がかみあう必要を表現するのに、「良知」・「良能」の訳語はうまい選択である。

ただ、Chambersの原書が、mindは神が与えた(小幡訳では「天に稟け」た)分割できない一つの(single and indivisible)実体であると強調する箇所を「単純無形」と誤訳、あるいは変更したことは気になる。原書では、人間の精神が、指導的な能力としての intellect のもとに一体のものとして統合されていること、つまり個人の人格の不可分性と指揮命令系統を説明したのに対して、多様な能力を含有した靈妙な心の有様のような書き方を小幡がしたのはなぜか。

これ以上詳しく論じる紙幅がないが、『弥児氏宗教三論』(J. S. ミルの宗教論)第弐編(明治11年)のうち、権威 authority が human mind に与える多大な影響を論じた箇所で「夫の憑拠ヲソリチイなるもの、人の精神に影響する不測の勢力」という訳文がある(『著作集』第2巻168頁)。「憑拠」(よりどころ)という訳語も面白いが、ここでも human mind は「精神」であり、小幡の訳語の一貫性が確認できる。

他方でトクヴィルが言う public spirit を「義氣」と訳したことと照合すると(『著作集』第2巻369頁以下)。この点は柳愛林氏の近年の研究が詳しい)、小幡が人間の精神の構造と働きを日本語でどう記述しようとしていたのか、興味はつきない。

小幡篤次郎アルバム



①



②



③



④



⑤

① 慶応3(1867)年頃 松山棟庵と。

② 断髪後すぐか。断髪は『慶應義塾五十年史』では明治元年の頃、石河幹明『福沢諭吉伝』では明治3年頃となっている。台紙裏面には「東京浅草 横浜馬車道 内田九一製」と印刷されている。

③ 福沢家旧蔵の写真。撮影年未詳。裏面に「写真師 丸木利陽 東京芝新シ橋角 国会議事堂前」の文字やロゴ等の印刷がある。

④ 撮影年未詳。“KEIOGJUKU UNIVERSITY PORTFOLIO CLASS OF 1904”に掲載されている。

⑤ 桜陰居士編、歌川国英画
『日本英傑百首』
明治25(1892)年刊
明治期に流行した百首シリーズ(○○百選)に描かれた小幡篤次郎。
特徴的な頭髪を“自虐ネタ”にして
いたという(「小幡先生逸話(七)」
『時事新報』7752号)。

⑥ 明治7(1874)年 乗馬仲間と。左から朝吹英二、福沢諭吉、中上川彦次郎、小幡、莊田平五郎、草郷清四郎



⑥

⑦ 明治25(1892)年12月18日 慶應義塾出身国会議員集合写真。芝紅葉館で開催された懇親会で撮影された。前列左から4人目が福沢、右隣が小幡。中列左端は犬養毅。以後総選挙後には、このような会合が開催されるようになる。



⑦

⑧ 明治29(1896)年12月 慶應義塾大学部文学科卒業写真。前列左から4人が福沢、右隣が小幡、右端は森鷗外。森は、明治25年から32年まで文学科で審美学を教えていた。



⑧

小幡篤次郎略年譜

年(和暦)	主な著作
天保13年 1842	<p>6月8日中津藩士小幡篤蔵の「次男」として中津殿町に生まれる *篤蔵・とし夫妻の長子であったが、父が藩内の政争に巻き込まれて隠居したのちに生まれたので、すでに養子が小幡家を継ぎ、「次男」の扱いであった *生家は現在新中津市学校</p>
嘉永5年 1852	<p>父篤蔵死去(47歳) 儒学者野本白巖に従い、宇佐の塾で学ぶ</p>
安政4,5年頃 1857, 8頃	藩校進脩館に入学する(万延元年館務、元治元年教頭)
元治元年 1864	<p>協力者を求めて帰省した福沢諭吉に乞われ、江戸の福沢の塾に入る *門閥制度下では交流がないはずの上士と下士だが、福沢とは旧知の間柄で「西洋事情」も刊行前に読んでいたという(福沢先生紀年講話会での演説)</p>
慶応2年 1866	<p>塾長になる(～明治元年頃まで) *慶応年間の入塾生の回想によれば、小幡は自らが講義を受ける傍ら、翻訳作業の相談にのるなどよく彼らの面倒をみていた 幕府開成所でも教鞭を執る *ABCの学習から始めて約2年で、「学術宣敷」翻訳もできることが買われ、第二等教授方で採用された(翌年第一等に昇格)</p>
慶応4年 1868	弟と共に日本で編纂された初のイディオム集を出版する
明治元年 1868	
明治2年 1869	西欧や西洋文明に関する翻訳書を次々と出版する *意味を表すふりがな(「蛮野」に「ひらけぬこと」など)や原音を表すふりがな、挿絵などを駆使してわかりやすさに努める
明治3年 1870	
明治4年 1871	中津市学校創設に尽力、初代校長となる
明治5年 1872	福沢諭吉と同著『学問のすゝめ』初編が出版される
明治6年 1873	
明治7年 1874	この頃から翌々年頃にかけて自宅で、A.トクヴィルの『アメリカのデモクラシー』の講話会やJ.S.ミルの輪講の会を催す(「小幡先生逸話(四)」「時事新報」7746)
明治8年 1875	福沢諭吉著『文明論之概略』緒言に小幡への謝辞、第10章に小幡の論説が引用され、「真に余が心を得たるもの」と評される
明治9年 1876	東京師範学校中学師範科(のち高等師範学校)創立に際し校務をとる
明治10年 1877	弟甚三郎の墓参も兼ね、米国および欧州を訪問する
明治11年 1878	
明治12年 1879	東京学士会院会員に選ばれる(～明治14年)
明治13年 1880	交詢社創立に尽力し、幹事を務める
明治16年 1883	2月中津に行き、土族の結社天保義社および中津市学校の処分を行う
明治18年 1885	
明治19年 1886	
明治21年 1888	
明治23年 1890	3月慶應義塾塾長となる(～明治30年) 9月貴族院議員となる
明治31年 1898	4月慶應義塾副社頭となる
明治34年 1901	10月慶應義塾社頭となる
明治38年 1905	4月16日死去、広尾祥雲寺に葬られる



『英文熟語集』(共編)

『天変地異』

『博物新編補遺』

『西洋各国錢穀出納表』

『生産道案内』『英式艦砲全書』

『英氏經濟論』(明治10年完結)

『上木自由之論』

『会議弁』(共著)

『経済入門 一名生産道案内』

『弥児氏宗教三論』第壱編

『弥児氏宗教三論』第弐編

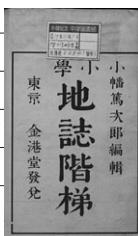
『議事必携』

『舶用汽機新書』

『小学歴史階梯』

『日本歴史』『小学歴史』

『小学地誌階梯』





『小幡篤次郎著作集』別巻の刊行

西 沢 直 子

『小幡篤次郎著作集』は、2025年7月の別巻刊行をもって完結した。2020年4月7日、編集がスタートした直後にコロナ禍による緊急事態宣言が出され、予期せぬ幕開けとなつた。以来2022年3月に第1巻、2023年3月に第2巻、10月に第3巻、2024年3月に第4巻、11月に第5巻と刊行を重ね、当初は全5巻の予定であったが、技術系の翻訳書と小幡差出書簡を収録した第5巻が700ページを超える分量となり、年譜や索引のために別巻を設けることにした。

独立した1冊を準備するのであれば、年譜と索引にとどまらず、小幡の著作を理解するために参考となる資料も収録することとし、別巻は1) 小幡篤次郎宛書簡、2) 記名原稿ではないが小幡の著作とされているもの、3) 既刊収録の諸文集と書簡に関する追加情報、4) 年譜、5) 索引の構成となった。

1) 小幡宛書簡は、29通を収録した。数が少ない上に内20通は福沢諭吉の書簡である。小幡も福沢同様、来簡は保存しない主義であったのか。この著作集が呼び水となって新たな発見があることを期待したい。

2) は、刊行物に小幡の起草であると記載されているものを収録した。たとえば慶應義塾命名の記といえる「芝新銭座慶應義塾之記」は、『慶應義塾百年史』によれば、小幡が考え福沢が修正を加えたものという。記名原稿が現れない限り推測の域はでないが、これまで表に出てこなかった小幡の業績を考えるには、検討する価値はある。

また戦前までの慶應義塾の名物行事のひとつに、携帯用の灯火を棒の先につけ、松明のように高く掲げて進むカンテラ行列があった。小幡はその行進歌数曲の作詞を担当している(『慶應義塾学報ほか』)。明治27(1894)年から37年という世相を反映して戦意高揚の色が濃く、時代的制約の中での彼の思想と行動を考える材料のひとつとなろう。

今回の著作集では小幡の詩歌を収録できなかつたことが悔やまれる。特にたくさんの作品が残されている俳句は、小幡の為人を知る格好の資料にならう。亡くなる4日前に作ったとされる辞世の句や、結局は叶わなかつた初孫に会いたい気持ちを詠んだ句は、年譜に掲載した。

福沢の命によって門下生たちが作成した、慶應義塾のモラルコードともいわれる「修身要領」は、小幡起草の原稿とされるものを慶應義塾図書館が所蔵している。但し筆は小幡だけではなく、石河幹明や北川礼弼による付箋もあり、文字起こしではわかりにくいため、影印版で収録した。

3) 編集を進める間に、国立国会図書館のデジタルライブラリーの精度が飛躍的に上がり、「小幡篤次郎」で検索してヒットする件数は、ここ2年程で5500件台から7500件弱へと増えた。そこで新たに2点の序文を見つけて、また宛書簡との整合や年譜作成過程で判明した、小幡差出書簡に関する訂正を記載した。

4) 年譜は、これまでごく簡単な略伝しか編まれることがなかったため、基礎となるデータが乏しく、『交詢雑誌』(明治13年～)『時事新報』(明治15年～)『慶應義塾学報』(明治31年～)に掲載された「小幡」に関する記事について悉皆調査を行つた。ただ、例えば慶應義塾評議員会の開催は必ずしも『時事新報』の記事になつてゐるとは限らず、この件は議事録で補いはしたが、典拠とした資料の性格による濃淡が生じてしまつたことは否めない。

前述のように国立国会図書館デジタルライブラリーの充実により、挿入できる情報は増えていった。機関誌まで検索できるようになって、大日本水産会など初めて関わりが知れた団体もある。貴族院議員としての活動も、帝国議会会議録検索システムを利用して、できるだけ内容にも踏み込んで記事にした。利用できるデータが増えたことは喜ばしいことであったが、年譜に落とし込む作業量が増え、最終的な確認が行き渡らずミスも多かろうと思う。記事から開催日を読み取る際に起つた間違いもあり、一周忌法要は明治39年4月16日の間違いである。単行本の刊行情報も漏れたものがある。利用される方々には本当に申し訳なく、この場を借りてお詫びしたい。多くのご指摘をいただき訂正できれば幸いである。

5) 『小幡篤次郎著作集』は電子版もあり、電子版では自由に検索ができる。紙媒体でもなるべく便宜をはかりたかったが、人名索引および書名索引のみとなつた。小幡の固有名詞表記の多くは、検索したい私たちの想像を超えて、本文から切り取つて並べたのでは索引として意味を成さないと思われた。また表記は揺れ動き、同一人物か否を調べるのにも時間を要した。並び順は姓名を合せての50音で配置した。『小学歴史階梯』『小学歴史』には多くの歴史上の人物が登場するため、吉川弘文館の『国史大辞典』の方式に倣つた。少しでも利便性のある索引となつてゐることを願う。

ようやく完結までたどり着いた。しかし、これは始まりである。多くの指摘を受けて、間違いを正していくたい。小幡篤次郎に関する研究が推進することを冀望して止まない。



川崎勝さんのこと

福沢研究センター顧問 小室 正紀

福沢研究センター客員所員の川崎勝さんが、6月10日に亡くなられた。この2年ほど、病と戦っていたので必ずしも突然の訃報という訳ではなかった。しかし、まだまだ頑張っていただけたと思っていたので訴えどころのないような無念の想いに襲われた。

川崎さんと初めて知り合ったのは、『福沢諭吉書簡集』の編集委員会が1998年4月に発足し、飯田泰三さん、坂井達朗さん、寺崎修さん（故人）、西川俊作さん（故人）、西沢直子さん、松崎欣一さんと共に、川崎さんと筆者も委員となった時であった。委員会は、福沢研究センター所長であった坂井さんのリーダーシップの下で、企画の発案者一人であった福沢諭吉協会理事の竹田行之さん（故人）や出版を担当する岩波書店の沢株正始さんもしばしば加わり、ほぼ毎月という頻度で開催された。そこでは、膨大な書簡の整理の仕方から始まって、文字の起こし方、注記や解題の付け方など、まずは編集方針をめぐって、真剣な議論が腹蔵なく行われた。その中で物静かではあるが、時に適切なコメントをする川崎さんの姿が印象に残った。

編集方針が決まり、各委員が分担して作業を行うようになってからも、毎月の編集委員会は行われ、進行状況を確認し、書簡の読みをはじめとして分担の注記や解題についても互いに意見を交換した。完結までには合宿での委員会も何回か行われ、また、毎月の委員会の後では一献傾けながら、『書簡集』の問題を超えて話に花が咲いた。川崎さんや私を含め二次会に流れ込む者もあり、終電近くまで話を続けたこともあった。

2003年の『書簡集』完結まで、ほぼ5年間、このような同じ釜の飯を食うようなお付き合いをさせていただいたので、川崎さんとの交流も深いものとなっていました。住まいが比較的近かったことや、共に父親が歴史家であったことなどもあり、筆者としては兄貴のような親しみを感じてもいた。そのような交流の中で特に印象深かったのは、資料の発見や再検討に基づき研究を進めようという、川崎さんの実証精神である。それは例えば、晩年に『福沢手帖』に3回にわたって連載された「資料から見る小幡篤次郎のことども 開成所と小幡篤次郎」からもよくわかる。この論説では、それまでは経歴から類推されていた小幡の高い英学能力を、東京大学史料編纂所所蔵の幕府右筆所の記録や開成所の伺といった史料などを用いて実証している。川崎さんが『馬場辰猪全集』、『植木枝盛集』、『津田真道全集』、『福沢諭吉書簡集』そして遺作となった『小幡篤次郎著作集』、『新編西周全集』などの編者や刊行委員を引き受けられたのは、さまざまな行

きがかりもあったのだろうが、それ以上に全集や著作集などという形で資料を適切に遺すことに強い関心を抱いていたからだと思う。

『書簡集』以降もさまざまな形で交流が続いた。日本経済思想史学会でも一緒に、地方で開催する年次大会の時には旅先でゆっくりと飲むこともあった。2006年度に川崎さんがサバティカルを取られた時には、筆者が属していた慶應義塾大学経済学部の訪問教授になってくださいり三田を研究拠点にされたので、お話しの機会も多かった。筆者が住んでいる西荻窪は川崎さんにも馴染みの地で、行きつけの光寿司という店をご紹介いただき、奥様の千鶴さんや恩妻も交えて歓談したこと思い出深い。ただ、その光寿司も今はもうない。そういうえば、筆者が今もお世話になっている西荻窪の歯科医も川崎さんのご紹介であった。

川崎さんと取り組んだ最後の仕事は、福沢諭吉協会の運営であった。2023年に、坂井達朗さんがご年齢を理由に常務理事を辞退され、その後任に川崎さんが就任し共に役務を担うことになった。その頃から、やや歩きにくくなられたこともあり、常務理事としての打ち合わせは、お住まいに近い高円寺の喫茶店トリアノンで行うのが常であった。会誌の執筆者やセミナーの講演者などについての相談では、川崎さんのリベルルな歴史観と共に福沢諭吉研究にとって福沢協会を出来るだけ意義あるものにしようという強い熱意が感じられた。最後まで奥様の介護のもと車椅子で協会のセミナーへ出席されたのも、その熱意の表れだと思う。

トリアノンでの常務理事打ち合わせの最後は5月9日であった。最後数回の打ち合わせは、4点支えの杖を頼りにゆっくりと歩いて店までいらした。事務的な打ち合わせ以外に、こういう人に書いてもらったらいいのではないか、ああいう方に話してもらったら刺激になるのではないかと、福沢協会の今後を語っていた。今から思うとあたかも遺言のようでもあった。5月の役員交替を前に、お身体の負担となることが心配ではあったが、敢えて重任を提案した。「名前だけになるかもしれないけれど、『小幡』も終わってないから……」と、躊躇しながらもお引き受け下さった。しばしの沈黙の後のその短い言葉に、病軀を押しての決断を感じ、それ以上何もお答えせずに話題を移した。

5月24日、福沢協会の総会・記念講演会・理事会に車椅子でいらして、そこでお会いしたのが最後となった。ご冥福を祈るばかりである。



川崎勝氏が令和7(2025)年6月10日に亡くなられた。令和2年から始まった一般社団法人福沢諭吉協会と慶應義塾の共同事業である『小幡篤次郎著作集』の刊行は、川崎氏なくしては完結に至らなかつたと断言できる。刊行委員としてだけでなく、編集の細大にわたって助言をくださり、また解題の執筆やテクストの校正作業に多大なご尽力をいただいた。ご体調が芳しくない中、貴重な時間を、本当にたくさん『小幡篤次郎著作集』に費やしてくださっていた。亡くなられる直前まで、最終巻に収録する年譜の校正に取り組まれ、入力ミスを見つけてくださっていた。別巻をお見せすることができず、筆者の無力さが悔やまれてならない。

川崎氏は、昭和17(1942)年12月28日東京にお生まれになり、明星学園中学校、高等学校を卒業された後、法政大学社会学部社会学科に進学され、同大学大学院社会科学研究科社会学専攻修士課程、続いて博士課程に進まれた。大学院在学中から栃木県史編纂委員会調査員や国立国会図書館憲政資料室研究員を務められ、博士課程を満期退学後には昭和53年3月から59年7月まで地方資料センター委員助手を務められた。また埼玉県戸田市、栃木県芳賀郡益子町、福井県小浜市、神奈川県足柄下郡真鶴町などで、市史や町史の専門調査員や専門委員、編集主任、編纂委員を歴任された。

筆者が初めてご一緒したのは、平成4(1992)年5月から専門委員を務められていた山口県史編纂委員会で、農商務省に関する資料の調査を行ったときであった。平成5、6年頃で、おそらく筆者はあまり役に立たなかつたと思うが、優しいお人柄が印象的で、ご指導を受けながらなんとかこなしたのを覚えている。翌5年度からは慶應義塾福沢研究センターの客員所員になられ、筆者も同じ頃同センターでの仕事を再開することになった。その後福沢諭吉歿後百年の企画として、慶應義塾で『福沢諭吉書簡集』を編纂し、平成13年より岩波書店から刊行することになった際、編集委員としてご一緒することになった。前述の市町村史だけでなく、既に『馬場辰猪全集』(岩波書店、1987-1988年)『植木枝盛集』(岩波書店、1990-1991年)の編集をなさつていて、様々な場面で適格な助言や建設的なアイディアを出された。

他にも『津田真道全集』(みすず書房、2001年)『新編西周全集』(国書刊行会から2025年9月に配本が開始された)など、明治期洋学者の著作集の編纂は川崎氏なくしては成り立たないほど、大きな存在であった。西周については、明治20(1887)年から27年6月までの日記を定期

川崎勝氏の業績

福沢研究センター所長 西 沢 直 子

的に翻刻され、『南山経済研究』の14巻3号から36巻1号、2000年から2021年の長きにわたって発表され続けた。他の研究者では真似することができない、資料に真摯に取り組まれる川崎氏だからこそ、成し遂げられた研究といえよう。

教育に関しては、平成6年から文教大学で講師を務められ、平成9年から22年まで南山大学経済学部で教授を務められた。同大学では若手教員に慕われ、指導的な立場で研究会活動等を行っていたと聞く。林順子氏、岡部桂史氏と編纂された『工業化と企業家精神』(日本経済評論社、2014年)はその成果のひとつであろう。

多くの論文や書評、資料紹介を執筆されている中で、特に馬場辰猪、津田真道、西周、福沢諭吉、田口卯吉の研究には、心血を注いでおられた。主な論文を挙げれば、
・「馬場辰猪と自由党」『福沢諭吉年鑑』22, 1995年
・「シモン・フィッセリングと「経済学原理序論」—津田真道と西周への「筆記口授」』『南山経済研究』13(3), 1999年
・「交詢社設立についての一考察」『近代日本研究』22, 2006年
・「福沢諭吉と内村鑑三：日清戦争の評価をめぐって」『福沢諭吉年鑑』32, 2005年
・「書簡に見る福沢人物誌(10)馬場辰猪—福沢門下の民権家」『三田評論』1076, 2005年
・「温經知世：経済学者の思想と理論 (vol.109) 田口卯吉 Ukichi Taguchi 1855-1905 徹底した自由主義、自由貿易の先見」『エコノミスト』91(54), 2013年
・「馬場辰猪日記」から見た板垣退助洋行問題』『近代日本研究』33, 2017年
・「福沢諭吉の鉄道論」『近代日本研究』34, 2018年
・「板垣洋行問題とその周辺：「馬場辰猪日記」から見た板垣洋行問題 補論」『福沢諭吉年鑑』44, 2017年
・「田口卯吉の鉄道論：福沢諭吉・『東海経済新報』との関連で」『武蔵野大学政治経済研究所年報』15, 2017年
・「田口卯吉の『時事新報』批判」『武蔵野大学政治経済研究所年報』16, 2018年
などである。

また小幡篤次郎については、『福沢手帖』194(2022年)、195(同)、196号(2023年)に、「資料から見る小幡篤次郎のことども(1)開成所と小幡篤次郎」を連載された。(1)とあるのは、続編を計画されていたのであろう。

もうあの笑顔にお会いできないと思うと、悲しくて寂しくて仕方がない。心よりご冥福をお祈り申し上げる。

新収資料紹介

2024（令和6）年12月から2025（令和7）年6月までの間に、福沢研究センターに収蔵された資料の一部を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきました。すべての資料をご紹介できませんが、この場をお借りしてお礼申し上げます。

（なお第42号「新収資料紹介」において、令和6年10月から令和7年3月までの期間に収集した資料を紹介しましたが、同期間に収集した資料で未紹介のものについても、関連資料を収集したことから本稿でご紹介します。その資料については●で表記しました。）

■太田玄讓宛福沢諭吉書簡 明治19（1886）年10月18日付 1通

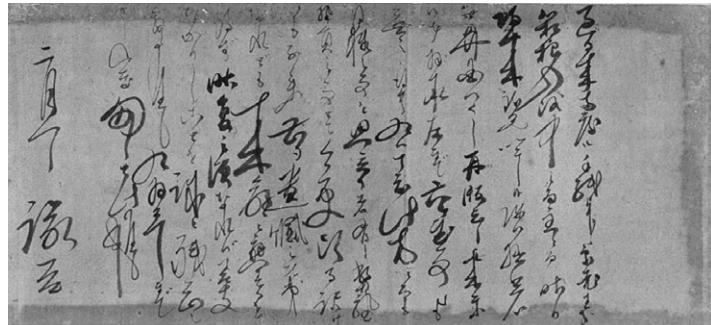
【購入】

太田家は長門国船木の医家。本書簡は太田家と、同じく医家である町田家に伝わる近世後期から明治期の書状を集めた巻物に収集されたものである。太田玄讓は適々斎塾姓名録によれば、嘉永7（1854）年3月8日に適塾に入塾した医者である。同じ巻物には太田玄讓宛長与専斎書簡も収められており、適塾門下生の交友の様子がわかる。本書簡は東京の済世学舎に遊学した玄讓の子・守一郎に託された書簡（福沢先生宛太田玄讓書簡案文が同じ巻物に同封）に対する返答である。初めに守一郎が無事福沢の元を訪れたことを報告し、近況報告と土産への感謝、懐旧の念を記し、漢詩を添えている。書簡集未収。

●中原範二（治三郎）宛福沢諭吉書簡 明治27（1894）年2月1日付 1通

【購入】

中原範二是慶應元（1865）年の生まれ。先述した太田玄讓の二男で、呉服商である中原家の養子となり家業を継ぎ、船木貯金銀行頭取や厚狭郡郡会議員、船木町町長をつとめた。本書簡は『世界国尽』の再版を願う中原への返答で、福沢は同様の申し出をした人物がいるため了承できないと返答している。再版を請う福沢諭吉宛中原範二書簡案文が同箱に別添する。中原は自身が幼年の頃『世界国尽』で学んだこと、今時の児童の発達のため再版したく福沢の許可が降りれば書肆を手配する旨が記され、福沢著作の受容の点からも興味深い。書簡集未収。

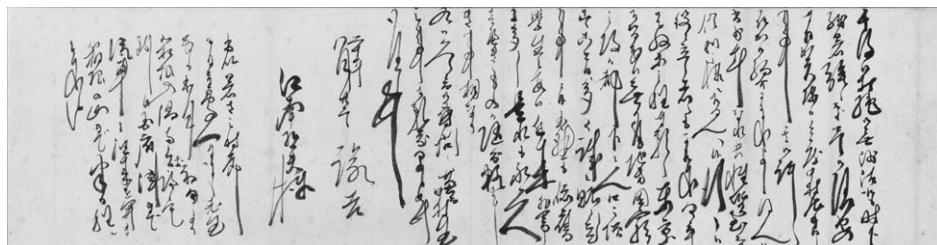


新収資料紹介

■江南哲夫宛福沢諭吉書簡 明治20(1887)年8月22日付 1面

【寄贈】

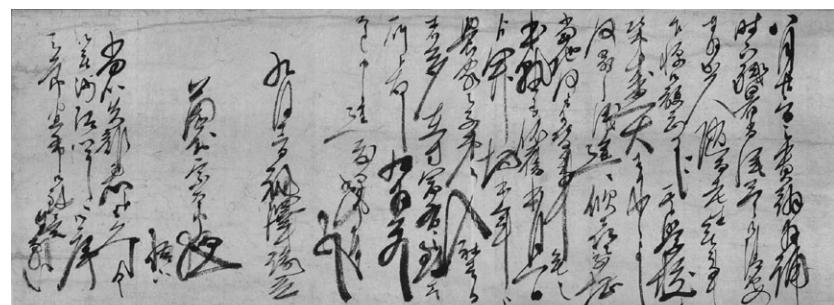
江南哲夫は嘉永6(1853)年に生まれた。明治7年に慶應義塾に入塾し、その後三菱に入社した。三菱では岩崎弥太郎に随行し上海支店勤務を経験した。明治17年に東京第二十国立銀行に入行し函館支店支配人をつとめ、明治21年より第一銀行で韓国仁川支店支配人となった。明治30年に東京火災保険会社に入社し大阪支店支配人を勤めたのち、明治33年に南山合資会社を設立し鉱業に従事した。この書簡執筆時、江南は函館在住であり、福沢は明治20年入塾で根室出身である中村辰五郎の世話を頼んでいる。



■菌村宗太郎宛福沢諭吉書簡(年未詳9月12日付) 1幅

【購入】

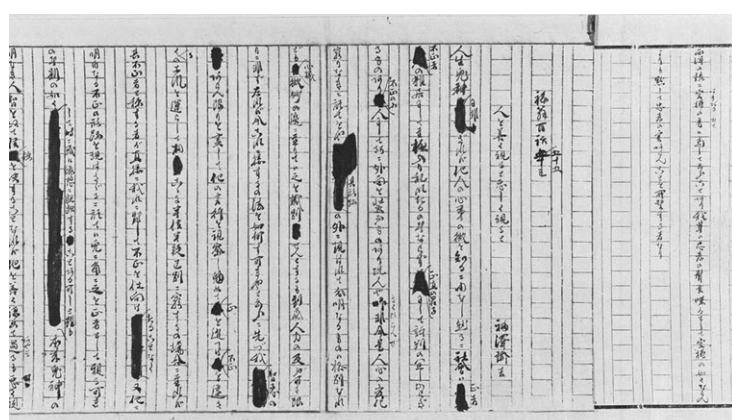
菌村宗太郎は画家・菌村雪嶺のこと。菌村は和歌山に表具師の家に生まれ、明治11、12年頃東京に出て高等教育を受け、図画と数学を学んだ。その後郷里に戻り、教職に就いた。明治25年8月刊行の菌村宗太郎著『算術講義要略第1巻』には、菌村の肩書きが記載されていないが、緒言に「余力多年実地ニ臨テ算術ヲ教授スルニ当リ」と記しており、和歌山県和歌山市の在住の出版人によって出版されていることから、この時点で和歌山において教職についていたものと推定される。明治26年4月刊行『新選普通毛筆画帖説明書』では、「和歌山県尋常師範学校教諭菌村宗太郎著」と肩書きが記されている。福沢と菌村の関係性は不明だが、書簡では当地は相変わらず変化はないしながらも、在方の「富有」のためか農家の子弟が多く入塾したといった慶應義塾の近況を報告し、菌村方の学校の様子についても気にかけている。書簡集未収。



■福沢諭吉自筆原稿 福翁百話六 1巻

【寄贈】

福沢諭吉の四女・志立滝ご子孫より寄贈いただいた。「福翁百話六 6」と記された題箋の巻物に収められた『福翁百話』五十四篇から六十五篇の福沢諭吉自筆原稿である。福沢自ら校正を入れており、丁寧な加筆・修正が確認できる。志立滝の書付が付属する。



(文責・松岡李奈)

主な動き

■ 福沢研究センターワークショップ

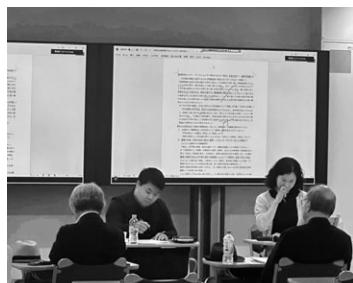
—明治における「西洋」を読み直す— 開催

6月13日(金)15時45分から大阪シティキャンパスにおいて、「明治における「西洋」を読み直す」と題したワークショップを行った。元治元(1864)年の入塾以来、福沢諭吉の補佐役であった小幡篤次郎は、アレクシ・ド・トクヴィルやジョン・ステュアート・ミルの著作を翻訳し出版している。小幡は彼らの著作を読んで、どのような社会を構想したのか。また翻訳を通じ、人びとにいかなる情報を伝えようとしたのか。明治の一知識人における西洋の受容とその転化から、近代日本の一側面を考えてみよう企画した。

当日は山尾忠弘氏(大阪経済大学経済学部准教授)から『思想の国際転移』:J.S.ミル・福沢諭吉・小幡篤次郎をめぐって、柳愛林氏(九州大学法学研究院政治学部門准教授)からは「小幡篤次郎とトクヴィル:言論の自由と地方自治の視点から読む『アメリカのデモクラシー』」の題でご報告いただき、その後安西敏三氏(甲南大学名誉教授)から講評をいただいた。山尾氏の報告はミルの受容における福沢と小幡の相違について、柳氏の報告は歴史の「貯蔵庫」における案内役という小幡の位置づけなど、どちらも多くの示唆に富む報告であった。当日は会場、zoom配信を合わせると131名に及ぶ申し込みがあり、閉会は19時をかなり回ってしまったが、司会の不手際で安西氏の講評に対する報告者のコメントや質疑応答に十分な時間を取ることができなかった。

3氏には10月から始まる大阪シティキャンパス福沢研究センター設置講座で、再度のご登壇をお願いした。多くの方にご参加いただければ幸いである。

(文責 西沢直子)



■ ローカルリーダー研究会の開催

慶應義塾福沢研究センターでは、2022年度よりセンター内研究会として「近代日本の慶應義塾とローカル・リーダー」研究会を立ち上げた。慶應義塾出身者が近代日本の地域社会のなかで如何なる活動をしていたかを解明することを目的としており、2025年度は、8月21日(木)に、第1回研究会を行い(慶應義塾大学経済学部附属経済研究所経済史ワークショップと共に開催)、前半は、研究会メンバーの平野隆氏が戦前期日本の百貨店業界における慶應人脈が果たした役割について研究成果を発表し、後半は、東北大学の加藤諭氏を招いて、研究会メンバーの三科仁伸氏の近著『戦前期日本の学閥ネット

ワーク』の合評会を行った。平野氏の発表では、百貨店業界のなかで三越に次いで慶應人脈が強かった白木屋の事例が取り上げられ、慶應義塾出身経営者の岩橋謹次郎・奥田竹松・西野恵之助・石渡泰三郎について議論が交わされた。三科氏の近著の合評会では、加藤氏から仙台の地場系百貨店藤崎家の植民地事業における学閥ネットワーク事例が紹介されるとともに、百貨店事業においては学閥ネットワークが偏在していたことが提起された。さらに学閥ネットワークの類型化に議論が進み、慶應義塾出身者の行動様式の特徴について討論が行われた。

(文責 中西聰)

■ 2025年度中津市アーカイブズ講座

中津市への協力事業の1つであるアーカイブズ講座は、8月27日(水)から8月29日(金)に、新中津市学校において実施された。学生は別府大学、久留米大学。九州大学から7名が、講師・TAは日出町歴史資料館、別府大学、久留米大学、九州大学、神戸大学、慶應義塾大学から10名が参加し、資料の整理・保存・利用に必要な技術を学ぶための講義と実習を行った。

8月27日は、セミナーとして「襖下張り文書の意義」(平井義人、日出町歴史資料館長)、「近世後期における伊勢神宮と金剛證寺の紛争」(上野大輔、慶應義塾大学文学部准教授・福沢研究センター所員)、「災害時に地域の歴史資料を保全する意義」(松下正和、神戸大学地域連携推進本部准教授)の3つの講義を行った。

8月28日は、襖の下張文書剥がしの実習であった。

8月29日は、古文書整理・目録作成実習であった。資料は前年に引き続き中津藩上士梅田家資料であり、主に近代の書状、漢詩の書付、写真資料を取り扱い、その目録情報を調査に記入した。書状は家族への近況報告を記したもののが多かったが、福沢諭吉の死去や、義和団事件・日比谷焼打事件などの記述も見られた。今回学生が作成した調査は53点になる。

福沢研究センターからは、教員として所員の上野大輔(文学部)、西沢直子、松岡李奈が、TAとして横山寛(福沢記念慶應義塾史展示館専門員)、高野宏峰(福沢研究センター調査員)が参加した。

(文責 高野宏峰)



福沢研究センター諸記録（2025年4月～2025年9月）

■ 諸会議

- *2025年度執行委員会（4月16日、5月7日、6月4日、7月2日、8月6日、9月3日）
- *2025年度第1回福沢研究センター会議・慶應義塾史展示館所員会議（6月26日）
- *2025年度福沢研究センター・塾史展示館合同運営委員会（7月15日）
- *『近代日本研究』第42巻編集委員会（8月27日、9月30日）

■ 人事

<所 員>	新任 小山幸伸（文学部）	4月1日～
	新任 橋口勝利（経済学部）	
	新任 段瑞聰（商学部）	
	新任 伏見岳志（商学部）	
<専任所員>	新任 松岡李奈（助教）	4月1日～
<客員所員>	新任 大庭裕介	4月1日～
	退任 川崎勝	～6月10日（逝去による）
<研究嘱託>	新任 岡部敏和	4月1日～
	姜児玲	
<事務局>	新任 渋沢彩佳（事務嘱託）	4月1日～
	杉本有香里（事務嘱託）	
	加藤学陽（非常勤事務嘱託）	

■ 主な来往

- *都倉、丸善来客対応（4月4日）
- *都倉、吉村太郎氏来訪対応（4月4日）
- *都倉、軽井沢慶應会年史対応（4月10日）
- *都倉、黒黄会高橋明良氏来訪対応（5月14日）
- *西沢、松岡、ソウル大学名誉教授全秀京氏閲覧対応（6月23日）
- *西沢、江戸千家川上名心氏来訪対応（6月24日）
- *西沢、ラトガース大学若林晴子氏来訪対応（6月27日）
- *都倉、松岡、中津市長日吉地下壕案内（6月30日）
- *都倉、諸伏健太氏来訪対応（7月18日）
- *都倉、SFC中高生有志展示見学対応（7月24日）
- *松岡、中津市歴史博物館資料閲覧対応（7月31日）
- *西沢、服部悦子氏来訪対応（8月5日）
- *井奥顧問、三科客員所員伊東家資料整理（9月3～5日）
- *西沢、松岡、伊東真英氏美栄子氏来訪対応（9月4日）
- *西沢、米沢洋子氏来訪対応（9月22日）

■ 取材対応

- *都倉、塾生新聞対応（4月9日、7月29、30日、8月4日、9月8日）
- *都倉、映学社対応（4月16日、7月8日、7月12日）
- *都倉、BSテレ東対応（5月6日）
- *都倉、横浜日吉新聞対応（5月20日）
- *都倉、テレビ朝日対応（5月26日）
- *松岡、近代日本と福沢諭吉一中津市記者会見対応（5月29日）
- *都倉、NHK 美の壺ロケハン対応（6月20日、7月17日）
- *都倉、NHK ファミリーヒストリー対応（6月25日）
- *都倉、SFC高等部SFC新聞部対応（6月25日）
- *都倉、東京新聞対応（7月2日）
- *都倉、読売新聞対応（7月3日）
- *都倉、NHK 松山放送局対応（7月22日、8月25日）
- *都倉、NHK 将棋フォーカス取材対応（7月25日）
- *都倉、NBS 長野放送対応（7月28日）
- *都倉、市民タイムス対応（7月28日）
- *都倉、テレビ東京取材対応（7月30日）

■ 出張・見学

- *松岡、中津市出張（4月10～13日、5月29～31日、7月23日～28日）
- *都倉、安曇野出張（5月14～16日、9月16～18日）
- *松岡、鎌倉国宝館資料返却対応（5月15日）
- *松岡、日黒五百羅漢寺資料返却対応（5月16日）
- *西沢、中津市出張（5月29～31日、7月26～28日、8月25～29日）

- *西沢、松岡、大阪シティキャンパスワークショップ（6月13日）
- *都倉、故小泉妙氏資料確認のため芝浦出張（6月20日）
- *都倉、大阪出張（7月8～10日、8月7～8日、8月30～31日）
- *松岡、交詢社資料調査（7月16日）
- *松岡、東京大学史料編纂所、甘楽町資料館、富岡製糸場調査（7月17日）

- *西沢、資料受取のため中上川家訪問（7月22日）
- *松岡、国立科学博物館筑波研究所調査（8月20日）
- *都倉、横山、上原良司行事出席のため松本出張（8月23～24日）
- *西沢、県立公文書館にて調査のため大分出張（8月30日）
- *都倉、横山、漫画会館訪問のため大宮出張（9月4日）
- *西沢、日文研での資料調査のため京都出張（9月10～11日）

■ 講師派遣

- *都倉、一貫教育校新任教員研修（4月2日）
- *都倉、中等部新1年生特別講演（4月10日）
- *都倉、「広報のがっこう」講義（4月23日）
- *西沢、品川区シリバー大学講演（4月24日）
- *都倉、日吉新入生歓迎行事講演（5月10日）
- *都倉、東アジア文化交渉学会報告（5月11日）
- *都倉、文学部「人生の扉I」講義（5月13日）
- *都倉、KeMCo講座「ミュージアムとコモンズI」講義（5月14日）
- *都倉、SFC中等部道徳特別授業（6月12日）
- *都倉、船橋三田会講演（6月21日）
- *都倉、横山、日吉キャンパスツアー（7月1日）
- *都倉、浦和三田会講演（7月5日）
- *都倉、KOCC 戦争展ギャラリートーク・講演会（7月10日、8月7、8、31日）
- *都倉、展示館企画行事・ギャラリートーク（7月12、17日、8月4日）
- *都倉、武蔵野大公開講座（7月22日、8月5日）
- *西沢、松岡、アーカイブズ講座（7月25～29日）
- *都倉、軽井沢慶應会講演（7月26日）
- *都倉、横浜日吉新聞、東横線100周年フォーラム講演（8月19日）
- *横山、KOCC 戦争展講演会（8月31日）
- *西沢、日文研フォーラムコメントーター（9月9日）
- *都倉、松戸三田会講演（9月13日）
- *西沢、江戸千家講演会（9月23日）
- *都倉、学生部三田キャンパスツアー（9月29日）

■ その他

- *西沢、児童文化研究会学生対応（4月9、28日、9月16日）
- *都倉、KeMCo編集委員会（4月22日、9月8日）
- *横山、アメリカ野球殿堂資料貸出（5月1日）
- *都倉、日吉キリスト教青年会館保存修理工事打合会（5月9日）
- *西沢、松岡、調査員ミーティング（5月12日）
- *西沢、国際センター運営委員会（5月15日、7月10日）
- *都倉、港区文化財保護審議会（5月29日、7月4、31日、8月29日）
- *西沢、福沢旧邸保存会評議員会（5月30日）
- *松岡、明治維新史学会（6月14～15日）
- *西沢、三田史学会委員会（6月18日）
- *都倉、三田メディアセンター協議会（6月25日）
- *都倉、大学史資料協議会（6月26日）
- *横山、港区ミュージアムネットワーク（6月30日）
- *横山、渋沢、杉本、企画展関連イベント（7月12日）
- *都倉、美術品管理運用委員会（7月16日）
- *西沢、メンタリングプログラム（7月16日、8月1、21日、9月24日）
- *西沢、都倉、KeMCo運営委員会（7月22日）
- *西沢、KeMCo評議会（7月29日）
- *都倉、浅川地下壕保存の会三田ツアーリーダー（8月4日）
- *都倉、松岡、ローカルリーダー研究会（8月21日）

慶應義塾福沢研究センター通信 第43号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2025年10月31日（年2回刊）

編集 慶應義塾福沢研究センター

発行 〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

電話 03-5427-1604

<http://www.fmc.keio.ac.jp/>

印刷 (有)梅沢印刷所